

## 第5回阪大フォーラム準備ベトナム視察の報告

### - 第2部：ベトナム今日事情 -

高部英明

(本報告書は9月開催の表題の第5回阪大フォーラムの視察に05.2.20-24にかけて出かけた際の記録である。打ち合わせなどの時間外に、町を歩いたり、人と出会ったり、話したり、見たりしたことを思い出すままに書いた旅行記である05.02.23/25/03.03)

#### 1. ホーチミン市に着く

05年2月20日(日)、朝11時5分発のベトナム航空機で一路ホーチミン市に向かった。機体がB767-300とうちもあるのか、同市まで片道6時間も掛かった。関空からはハノイ直行便が週2回しかない。しかし、機中、松田先生が横で、色々面白い話を聞かせて頂いたので退屈はしなかった。ホーチミン市(むしろ、サイゴンといった方が我々の年代にはなじみがある)は人口600万の商業都市。空港にはバンの迎えがあり、市中心部のホテルに向かった。気温は31度だそう。日本の夏と同じである。ホテル・ボンセン(Bong Sen)。ドンコイ通というにぎやかなところにある10階建ての中級ホテル。一泊朝食付きで39ドル。値段の割には良いホテルだ。日本人利用客が多いそうだ。

5時過ぎに着き、Tシャツ、短パンに着替えて一人で歩くことにした。コースは飛行機の中で「地球の歩き方」で考えていた。前回(04年10月、第9回APPC [Asia Pacific Physics Conference: <http://www.ims.ac.vn/appc03/>])でベトナムに来た)同様、新着DVDを1ドル程度で買おうと歩く。すぐ本屋があり、ここは正統派で洋画のDVDがない。しかし、パリで買ったシャンソン歌手(気に入っている)の別のCDがあったので買った。2ドル程度。歩いていくと常深さんに出会った。一人で夕食を食べても面白くないので7時にホテルで待ち合わせることにした。

ホーチミン市の第1印象は「きれい」だ。バンの中からもそうだったが、ハノイに比べてずっと、きれいで都会。外資が沢山落ちている印象を受けた。人民委員会の建物は欧州の地方のお城を思わせる立派なものだ。通りには間口3メートル程度の小さな店が沢山並ぶ。

地図を見ながら夜、屋台が沢山並ぶというベントイン市場の所に来る。市場はそろそろ店じまいの準備であったが沢山の店が並び、人いきれがむんむんとしてくる。その外には、ホコ天に沢山のレストランが並ぶ。水槽に生きた魚やエビ、カニなどを並べ、チョイスさせて料理する。大きなカニがいたので、「幾らだ」と聞いたら、「1kg、10ドル」とのこと(後に書くように、値切れれば1ドル近い値段になるかも)安いではないか。食べたい、が、食あたりが心配だ。つばを飲み込む。中国もそうだが、東南アジアでは屋台などでは一切食べないことにしている。食あたり、下痢が起こるからだ。料理に使う水が問題なようだ。しかし、眺めていると欧米人も沢山いて、仲間に入りたくなるのを我慢する。

ここで、ベトナムの地酒だというボトルを買わされた。アルコール45度で15ドルだという。「高いなー」と言うと、子供がそばで世間話をしていた母親に何か話して「10ドル」という。まあ、寝酒にするかと買う(これが、すごくぼられていたことが後で分かった。ハノイについて、ホテルのすぐ横のコンビニで同じものを見つけた。約2ドルだった)。ぶらぶらと夕暮れた町を歩きホテルに帰る。

先ほどのお城のような建物の前の公園はライトアップされ、子供が遊んでいる。良い雰囲気だ。

ホテルに着いて、常深さんと「ベトナム料理を食べよう」と近くのレストランをボーイに聞く。彼が教えてくれた所は近くの大きなホテルの6階のレストラン。入ると客が一組しかいず、ガラーンとしている。いただけない雰囲気だが、まあいいか、と座る。ビールを注文し、まずは乾杯。メニューでカニ料理を注文したら、しばらくして「カニがない。別のものにして下さい」という。この際なので、「常深さん別の店に行きましょうよ。ホテルの近くになぎやかな店があったよ」と。ビール代だけ払って出た。

ホテルから北に100mほどの所に「ベトナム料理」と書いた、にぎやかでこぎれいな店があった。そこに入る。なかなか美味である。私は上品なメインの料理にまだお腹にスペースがあるので、常深さんはデザート、私はライス・ヌードルの炒め物を食べた。美味しかった。満足であった。

## 2. ベトナム国立大学ホーチミン校訪問とハノイの第1夜



写真1：ホーチミン校での歓迎風景。大貫先生が日本側の挨拶をしている。

翌朝は8時45分、ロビー集合。バンでベトナム国立大学ホーチミン校に向かう。ホーチミン校の物理学科がある建物に着き、立派な会議室に案内された。話の様子は第1部に書く。

この日の慌ただしいスケジュールをこなし、1時にホテルに帰り荷造りをして空港に向かう。ハノイまでは直線距離で1000kmほどもあり、2時間かかる。夕方5時過ぎに

ホテルに着いた。ホテルは、10月にAAPPSの理事会を開催し、APPCのバンケット会場にもなったホテル・ホリズンである。見覚えのあるホテルに着いた。部屋は905号室。シーズンオフであることもあり、部屋代がツインの大きい部屋なのに、55ドルである。普通料金は190ドルでAPPCの際も70ドルだった。驚きだ。2階にはフィットネスやプールもある。プールで泳ごうと思いついたら、エントランスの丸屋根がプールになっている。水はやはり泳ぐには冷たい。やめた。ハノイに着いた時、機長は気温16度と言っていた。天気もどんよりしており、ホーチミン市とえらい違いだ。

夕食を何人が誘った。「今日は<sup>らいぎょ</sup>雷魚料理に誘われているので、高部さんも行きますか」と逆に誘われた。しかし、雷魚なんて、やなこった。子供の頃、近くの池に大きな雷魚がたくさんいたが、親からは「雷魚は絶対食べちゃダメ」と言われていた。金を出してまで食べたいとは思わない。そんなで、今日は2キロほど離れた旧市街まで運動兼ねて、一人で歩くことにした。ディナーのための腹ごなしも兼ねて。夕暮れから、夕闇になってきたが、店は開いているし、沢山人通り。地元の人たちは歩道にまで椅子を持ち出して何か食べたりしている。人の息吹、人のおいがする。日本にはあまり見られなくなった風景だ。



写真2：ホテル・ホリズン。私たちが泊まった5つ星のホテル。9月にはここでバンケットを行う予定。

歩いていると、しょっちゅうバイクのタクシーが寄ってきて「乗らないか」と素朴な顔で誘ってくる。知らないフルをしていると、聞こえなかったのかと勘違いし、何時まで

も着いてくる。「要らない」とジェスチャーで返事をする。初めて分かったようにあきらめて次の客を捜す。この国にはシクロという自転車のタクシーもあり、これにも声を掛けられる。しかし、バイクタクシーが圧倒的に多い。市内ではヘルメットも要らないので、客を乗せて運ぶようだ。車のタクシーは前回も何度か利用したが、バイクやシクロは利用したことはまだ無い。

地図を確認しながら鉄道を横切る。地図からは高架になっているのか、地下道を通るのかな、と考えていたのに、横切って驚いた。路面電車並の単線だけの鉄道だ。翌々日、昼間見た時は線路を通路代わりに沢山の人が歩いていた。

その先に食堂街があるとガイドブックに書いているので行ってみた。確かににぎやかな庶民の食堂が半分ほど、7時過ぎの段階で開いている。呼び込みもあるが、お腹が心配で、遠慮する。そうこう歩いている内に、ガイドブックご推薦の店の一つが近くにあることが分かり、そこで一人で夕食を食べることにした。「ハノイ・ガーデン」。確かに感じの良い、人のたくさん入っている所だった。

別室に案内された。入ってすぐ、日本人の男女が話していた。女性が熱弁を振るっている。ハノイ・ビールを注文し、料理は「地球の歩き方」ご推薦の柔らかい甲羅のカニ料理を注文した。ビールを飲みながら「一人じゃ、飯もうまくないよな」と考えていると、「大阪は、、」などの言葉が彼女の口からぼんぼん出てくる。そこで、ふられても良いから、隣の日本人カップルの所に行き、「一人なんて、もし、宜しかったら一緒させて頂けますか?」と聞いた。ヒゲ面の男性が、驚いたように「どうぞ、どうぞ」と言うので、ジョインさせて頂いた。



写真3：ハノイのレストラン「ハノイ・ガーデン」で一緒になったバックパーカー女史とジェットロの経済学研究者

まず自己紹介をし、怪しいものではないことを理解して頂く。その際は名刺など出さない。相手も自己紹介してくれる。でも、名前と彼女と何故ここにいるか程度。そこで、私がここにいる理由から説明しながら、相手の職業など聞き出す。男性はジェットロ（旧通産省の機構で、現在、独立行政法人）の研究所に勤める方。ベトナムの農業経済の研究のために2年半滞在する。今、1年半、経過したところ。「しめた」と思った。色々な情報が聞ける。彼女は元同僚で、現在はバックパーカー。ホーチミン市から出発し、イスラエル人などその場の仲間を見つけながら、途中の町に宿泊しつつ、北上してきた。「バックパーカーたる者、一泊、5ドル以上の宿に泊まってはいけない」と真剣に考えながら、バックパーカーしている、「真面目な」バックパーカーだ。

まず、「バックパーカー道」なる話題から入る。彼氏いわく「君は、バックパーカーとはこうで無くてはいけない、と考えすぎで、サバイバルをこなすことに生き甲斐を見だし、バックパーキングを楽しんでいるように見えない。真面目すぎるんだ」と。彼女、今日は旧市街の安宿に泊まり、明日は、ハーロン湾見物。「10月、私が行った時は霞んでいて、沢山の島がある雰囲気ではなかったが、それなりに楽しかったよ」と、私。彼は、「僕が行った時はとても良く晴れていて、きれいだったな。運が良かった。でも、明日は天気予報では雨だそうだ。雨のハーロン湾もいいかもね」と。彼女は当然、「意地悪ね」と返す。

彼女はベトナムの次はラオスから最後はタイに出て、バンコックから帰国することのこと。何ともタフな方だ。話す内に、今度、小学校の先生に採用され、大阪摂津市の小学校に赴任する事が分かる。「それで、大阪、大阪、だったんですね」と。このあたりから日本の教育システム、中教審の問題、ゆとり教育の見直しなどの議論をする。彼女は知らない大阪の小学校に赴任することの不安も漏らす。

阪大の連中が雷魚料理に出かけた話をすると、「雷魚ですか。脂っこいから明日の朝は胸がむかつく方が出るのでは」との事であった。

その後、ベトナム情報を得るべく、彼に色々質問した。貴重な情報を開陳しよう。

1. 「ベトナムでは学生の留学先の人気は、米国、オーストラリア、英国で次が日本、韓国の順。日本でも日本の国費留学生かどうかで箔が変わる。現在、フランスは人気がない」。どういう事かと言えば、「英語」がキーワードである。米国はあらゆる面で一番人気（ということは、一番優秀なやつは米国に行く）は理解できる。次がオーストラリアには驚いた。やはり英語が母国語の国で、地理的に近いことが理由のようだ。英語が話せるか、使えるかが、帰国してのその人の地位などに関係してくる。戦争では米国に勝っても、国際語、英語には弱いのが実情。日本も本当にピカイチの人材を留学させたいなら、せめて大学院の講義や研究室での議論に英語を使うぐらいの国際性を持って良いと思うが、いがかがな。

2. 「ベトナムでは男女かまわず、東洋人にはどこの国から来たか、年齢は何歳かと聞いてくる」。まず、国を聞く理由は相手が日本人なら、「歓迎します」の態度に変わる。中国人なら「御前は敵だ」の態度になる。理由は次に書こう。2番目の理由は、ベトナム語には自分と年が上か下かで、相手と呼ぶ代名詞が代わる。それは極めて複雑だそうで、相手が自分の母親より年上か年下かでも代わるそうだ。だから、若い女性相手にも「How old are you?」と聞いてくるそうだ。

3. 「ベトナム戦争後の中越戦争の後遺症は未だに残る」。まず、中越の「中」はもちろん中国。越は「越南」と呼ばれてきたベトナムのことである。「越」は広辞苑によれば「こえること」である。「こえる」とは何を越えるか？「中華文明を越えた南の野蛮な国」の意味であろう。ベトナムの歴史を読むと、11世紀まで中国王朝の支配が続いていた。従って、文字も漢字だった。ところが、今は、漢字は消え、15世紀に宣教師ロードが導入したローマ字をベースにした国語（「クオック・グー」という）が使われている。学校でも漢字を教えてないようで皆読めない。「地球の歩き方」の後ろにある歴史を読むと、中国に支配され、独立し、戦争し、と千年以上続けている。

4. 「今の旧市街には昔から住んでいた人は住んでいない」。これは、ベトナムと中国の関係悪化の結果である。ベトナム戦争に勝利し（1975年）それまで親密な関係であった中国との関係がギクシャクし始めた。関係悪化には3つの主な理由がある。まず、敵である米国と中国が接近し始めた事が原因。結果的に旧ソ連と親密になり、反中国の構造となる。2つ目は国境紛争で、南沙諸島と西沙諸島の領有問題の勃発。12月に私は中国のハワイと言われている海南島での会議に出たが、その西がベトナムの北部中央に位置しているのには驚いた。また、南沙諸島は中国の領有圏であり、フィリピン沖まで続いていると聞かされて、中国の広さに改めて驚いた。3つ目はカンボジア紛争への両国の敵対関係への介入である。こんな事で、1978年にベトナム政府が国内の華僑に「ベトナムに帰化するか、中国かその他の国に移住するか」の二者択一を迫った。結局、旧市街に住んでいた華僑達は裕福な者は米国などに移住し、そうでないが帰化を拒んだ者達は中国に帰たり、ボート・ピープルになり退去した。その後の旧市街にベトナム人が移り住んだ。

5. 「西欧で教育を受けたエリートも国に帰ると国のしがらみに戻ってしまう」。昨年10月、第9回APPC (Asia Pacific Physics Conference)をハノイで開催した関係で、こちらの現地実行委員の研究者との連絡に苦労させられた。その話をしたら、彼曰く、上記の通りで、この国のやり方とは以下の通りだそう。彼が、15人のワークショップをしようとしたが現地が協力してくれない。この場合、「協力せよ」と上の偉い副大臣から命令を文書で出してもらって、漸く皆が動くようになった。何事をやるにも、下の者は一番上から命令が下りてくるまで動かない。例え、私の場合のように関係者から緊急の問い合わせが来ても、「どう対応しましょうか」と議長に聞いたりしない。長から命令が出て来るまでじっと動かずに待つそうだ。西欧で教育を受けた人間も、この習慣には帰国してすぐに戻ってしまうそうだ。

6. 「ホーチミン市とハノイ市での値段のふっかけ方の違い」。ホーチミンでは既に私が経験したように10倍近い値段をふっかけてくる。私買った酒なども、「15ドル」と言いながら、「7ドルなら買う」とこちらが言うと、「どうぞどうぞ」と簡単に値下げするそうだ。どこまで下がるか分からないくらい。しかし、ハノイは割と堅気で、せいぜい倍くらいの値段を最初言ってくる。だから、値切り交渉もセコイものになり、少しずつしかまけてくれないそうだ。

7. 「ホーチミンとハノイでは言葉が全然違う」。方言だが、言葉はかなり違うとのこと。当然、書いたものは同じ。国土が南北に長いせいか、標準語化が出来ていない。ホーチミンではベトナム戦争後、ハノイから移住した人が多いのでハノイの方言も分かる人が多い。しかし、ハノイにはホーチミン出身者が少ないので、ホーチミンの方言が通じないそうだ。

主なところはこの7点程度か。参考になった。また、国民の年収は平均で一人当たり400ドル程度。これは、GDPから彼が割り出した額。参考までに10月にハノイに来た際、バスガイドが教えてくれたのは、都会で月収の平均が50ドル、都会の外資系で月150~200ドル、農村部で月12ドルだそうだ。

彼らとは閉店近くまで色々話し込んだが、ベトナムに関係する話に限って紹介した。「いやー、色々勉強させて頂いたので彼女の分は私がおごりましょう」と言ったが「実は、彼女の就職祝いにおごると言って来ましたから」という彼と半分ずつおごることにした。32ドル、私は16ドル払った。ビールも3本ずつ飲んだし、安い。

彼らと別れ、タクシーを呼んでもらって帰ることにした。もう11時近かった。タクシーの運転手が話しかけてくる。「バンバン。Beautiful young lady. No. 1. One hour, 50 Dollars」としきりに言う。あの手の誘いだと、すぐピンと来た。「No.」と言うと、ディスカウントしてくる。「No. 1, one hour, 30 Dollars」と。「No. No thank you. Go to my hotel.」と言って、断る。日本のビジネスマンや旅行者からの「需要」があるから、こんな「供給」があるのだな、と考える。日本人よ、清く正しく生きてくれ、と心で祈る。

タクシーは安全で安くてすぐ捕まえることが出来るので便利だ。車もきれい。さて、ホテルまで2km程度あったか。約2ドルであった。

### 3. ハノイ2日目、ベトナム国立大学ハノイ校訪問、本部の方とディナー

翌朝、8時30分に集合し、ベトナム国立大学ハノイ校に向かう。ここで、本部から来た4名の事務の方々と合流する。男性2人、女性2人。小川さんという事務の方、英語が異常に上手なので興味を持つ。この日は彼女たちを誘って、「地球の歩き方」No.1の店、エンペラーで夕食を取ることにした。詳しくは後に書く。

迎えに来てくれたのは Mrs. Vu Thi Quy さん。「クイ」さん、と呼ぶ。同校の International Relation Department の副部長と Center for Women Studies の副センター長の肩書きを持つ、英語の上手な中年の方だ。今回の会議の宿など諸々の面倒を見てくれる。立派な会議室に案内してくれた。まず、ベトナム側から挨拶があり、参加者 15 人ほどの教官の自己紹介があった。それを受けて、日本側の挨拶を大貫先生がし、各自の自己紹介となった。会議の様子は第 1 部にまとめるが、印象に残った面白いことだけ紹介しよう。



写真 4：ハノイ校での歓迎の様子。立派な会議室にそれぞれ約 20 名ずつが集まり挨拶の後、全員自己紹介をし、議題に入った。

このフォーラムでは阪大側から 21 世紀 COE の班構成に従い、A, B, C の 3 班に分けてパラレル・セッションをすることが原案である。A, B が物理系で、C が数学である。ハノイの数学者が「なぜ、数学が C と最後ののだ。学術で分類する際は数学が物理より先に来るはず。もし、

アルファベット順というなら、数学は B のはず」と言ってきた。あまりしつこく言うので、私が「分類はアルファベット。A, B, C は Astrophysics, Condensed Matter Physics, Mathematics の順だ」と答えたら、「俺は真面目に言っているのだ。真面目に答えてくれ」と言い返された。横にいた久野さん達と「さすがだね。日本の数学者は何も言わずにおとなしくしている。アメリカに負けた国と勝った国の元気の違いだ」とひそひそ話。彼はまた、「ハノイでやるのだから Osaka University より Vietnam National University, Hanoi がフォーラムの名前の先に来るべきだ」とも主張した。

全体会議の後、議長同士の話と、各班のプログラムなどの話と、私と相手の総務による事務的な話のそれぞれに別れて会合を続けた。その際に、相手の総務責任者がお金のことをしきりに問題にする。当然のことである。日本から 130~150 人が参加するので、ベトナムにも対応する程度の研究者や学生を集める努力をお願いした。当然、ホーチミン校からも沢山来てほしいと。すると彼が「ホーチミンからハノイの飛行機代の往復料金が 200 ドルくらい。これは、教授の月給とほぼ同じ（教授で月給が 400 ドル程度とか）。そんなお金をどうして用意しろと言うのだ」と。私は「この会議は AAPPS が正式に後援している。従って、UNESCO や ICTP, APCTP などに資金援助が申請できる。是非、そのようにしてほしい」と伝える。また、「会議名に Asia-Pacific も入っているの両国以外の参加者も募りたい」と言う私に、「ビザの取得には、申請者だけでなく受け入れ側の私たちが一人につき 10 ドル支払わなければいけない。その資金をどうするか」と彼が言う。悩みは尽きないが、日本企業が最近ベトナムにどんどん進出していることでもあり、趣旨と事情を説明し、企業に宣伝も兼ねた援助もしてもらおうことなども考えたりした。

ハノイ校の学生数。何と、6 万人だそうだ。しかし、その半分は英語を勉強する語学生。教授の数も極端に少ない。物理の教授はベトナム全土で 47 人だそう。教授になるためには 4 段階の審査があり、昇格するのが大変難しい。阪大の教授が 600 人いると言ったら、目を丸くしていた。



写真5：会議を終えて、建物から出てきたところ。これから昼食に行く。中央、指さしている大貫先生の後ろの方（黒皮のプレザーの方）がハノイ側議長のルオン教授。

会議を終え、議長の Nguyen Hoang Luong（「ルオン」と呼んでいる。名字の最初は良くある名前で「グエン」と読む）の招待で日本側5人ほどは瀟洒なレストランに向かう。

昼食の後は、今回会場に使う、ICC (International Convention Center)の現場見学となった。大変立派な会議場である。初日の全体会議の会場はホーチミンの金の胸像のある広い会場で、旧ソ連や中国など社会主義国特有の大ホールの構造である。小泉首相が昨年欧州アジア会議に参加した際、講演をしたホールだそうである。その他、全ての部屋を全員でぞろぞろ見て回った。一階も床が大理石の立派なホールである。

「こんなきれいな良い会場があったんだ」とは私の独り言。昨年10月のAPPC国際会議はホーチミン博物館で開催された。ホールも古いし、パラレル・セッションなど、宇宙物理のセッションは10人も入れれば一杯になる部屋だった。立ち見でギューギュー。「この国は国際会議の経験が浅いから、こんな状態なんだ」と理解していた。が、実は単にお金の問題であったようだ。5月の理事会でAPPCの議長のヒューさんが資金不足を訴えていた。結局、思うようにお金が集まらず、会場費の安い（もしかしたら元大臣のヒューさんのコネでタダだったかも知れない）博物館になったんだ、と理解できた。



写真6：阪大フォーラムの会場  
ICC (International Convention Center)。

会場での打ち合わせを終えて5時過ぎにホテルに着いた。バンケットは私たちが泊まっている Horison（「ホリゾン」と発音する）ホテルの宴会場を使う予定である。その場所の見学もした。実は、この場所は10月のAPPCでもバンケットの会場として3部屋打ち抜きで全部を使った。あの時、会場のドアを開けて「ウォー、広いなー」と感じたのを思い出す。あの時はバンケットの参加者は300名程度だった。この部屋なら、今回のバンケットも大丈夫と安心する。ホテルの担当者が具体的に説明してくれたが、問題は金額だけだ。



写真7：初日のプレナリーを行うICCのメイン会議場。300人はゆうに入る。

バンケット会場の下見で本日の仕事は終わり。小川さん達本部の関係者と6時10分にロビーで待ち合わせて、7人乗りのタクシーに5人で乗り、一路、ハノイ大聖堂に向かう。着いた時にはもう薄暗かった。この大聖堂は1886年に建設され、1900年にパリのノートルダム寺院のような2つの塔をもつ形に改築されたようだ。見た感じがすぐ「ネオ・ゴシック様式」であることが分かる。横のドアが開いていたので中にはいることにした。ちょ

うど中ではミサの時間で、牧師の説教が行われていた。スタンドグラスも立派でアジアには珍しい豪華な教会だ。しばし参列し、雰囲気を楽しむ、外に出る。

地図を見ながら目指すレストランまで約 1.5 km を腹ごなしに歩く。通りには店が建ち並び、私たちの足を止める。しばらく歩くとホアンキエム湖の南端に出た。夜景がきれいである。湖畔は公園になっており、清掃も良く行き届いている。湖の中に浮かぶ小島の「亀の塔」がライトアップされて白く湖上に浮かぶ。ロマンチックである。このすぐ近くに9月に総長が宿泊予定のソフィテル・メトロポリス・ホテルがある（結局ホテルは総長の好みで郊外のホテルのことに決まった）。湖の横手にはデパートとおぼしき建物があるので中を覗くことにした。高価な品まで置いてあるデパート。20分ほど、各自自由行動を取る。沢山の高級衣料品店や電気製品、時計などの店が並びテナントのデパートである。革製品やバッグなど物色したが、買うには時間が短すぎた（私は、翌日、ここで150ドルほど買い物をした）。

そこを出て、光に照らされたオペラハウスが目の前に見える通りを歩く。すると、右手に、私の好きなDVD店があるではないか。「ごめん、ちょっと時間ちょうだい」と、中に入る。ここは割と品の良いDVDを置いている。「品の良い」とは、カバー袋の写真がきれいという意味。現在、日本で放映中の「アレキサンダー」なども含め、一本、18,000ドン（126円。ホテルなどでのレートは1円=145ドン。空港で両替しなくても大きなホテルならどこでも空港とほとんど同じレートで円やドルをドンに替えてくれる）。この店で、8本、DVDを買った（今回、4回、DVDを買った。合計、なんと30本買ってしまった。たぶん、全部は見る時間がないだろう）。DVDは英語版なら英語を聞きながら英語の字幕を出していれば、ほぼ、内容について行けるし、ヒヤリングや英会話の勉強にもなる。以前、家族に言われたので、今まで見た映画でまた見ても良いと思うものも買った。DVDの説明は漢字と英語併記である。たぶん、中国か香港から入ってくるのだろう。

歩いているととてもきれいな電光イルミネーションの店がある。ここは、ナムフーンというベトナム料理レストラン。来る前に、私たちがベトナム料理のレストランに行くのだ、とミセス・クイに言ったら、「小泉首相がディナーを取った、ナムフーンが良いから行きなさい」と言われた。しかし、私は「エンペラーが良さそうなので、そちらにします」と。こじんまりした感じの良いレストランである、が、「またにしましょう。今日はエンペラー」と皆を促す。

エンペラーはトンホップ大学という小さい大学を左手に見ながら大通りを歩いた先にある。大学の塀の中程にあるバス停には大学帰りの学生と思しき集団がバスを待っていた。もう、旧市街も離れたいぶ南東に来たので通りは薄暗い。そんな中に、ここははっきり分かるレストラン・エンペラーがあった。寺院の門のような入り口を抜けるとレストランの中がガラス張りで見え、欧米のビジネスマン風の人たちで一杯だ。聞くと一時間待ちだと言う。そこで、一応、待ちに名前とホテル名、部屋番号を書いて、「1時間後の9時を過ぎても来ていなければ、キャンセルしてくれ」と伝えた。話し合い、先ほどのナムフーンに戻ることにした。

正解であった。ちょうど5人が座れるテーブルが3階に一つだけ空いていた。一階の階段の壁に名士が訪ねた時の写真が飾ってあり、小泉純一郎君の写真もあった。席について、まずはビールで乾杯である。「Hanoi Beer, Please」と注文。主に総長が宿泊するホテルや会議会場、バンケット会場の下見調査のために本部から4名が派遣されている。この後、タイのチェラロンコン大学にある阪大の東南アジア事務局を訪ねるそうで、そこを拠点に研究している阪大の生物系の先生が案内してくれるそうだ。だから、昨夜はタイ航空でバンコクを経由して夜遅くハノイに着いた。夕食も機内食であったとか。「では、今日は美味しいベトナム料理と行きましょう」と、私。

ハノイ・ビールはよく冷えていて大変美味しい。私は結局、3本ほども飲んだか。料理も決まり、話題に花が咲く。鈴木副学長や馬越副学長は私も個人的に存じ上げているので、自ずと彼らのことが話題になる。分かったことは、私が描いているイメージと彼らが接して感じているイメージが同じであること。お二方とも誰にでも同じように自然体で振る舞っておられることが分かった。ここで、小川さんの英語歴を聞かせて頂く。British Columbia 大学に2年半いたことがあるそうで、英語が上手なのはあたりまえ。加えて、帰国後は英語通訳を仕事にしてきたとか。

皆さん、複数の珍しいベトナム料理を注文され、分け合って食べる。仲間がいると食事も美味しくなる。私は、Soft shell crab の丸ごと蒸したものをいただいた。確かに胴体のからは柔らかく、身と一緒に食べると美味である。所が、大きな爪が二つあり、この爪の殻が固い。殻をつぶす例の道具を使っても、私の力でさえ割れないほどに硬い。一生懸命がんばると、たわわなほどの白い身が出てきて、これが美味しい。2時間ほども居たであろうか、皆さん満足して頂けたようで、誘った私としては満足である。10時過ぎに、もうほとんどお客の居なくなった店を後にした。出口の階段には日本の門松に相当する「キンカンの鉢植え」が二つ置いている。今年の旧正月（ベトナムではテトという）の元旦は2月9日であった。2週間を過ぎた今でも至るところの店先で見かけた。皆、背丈が2メートルもある大きな木で、キンカンより一回り大きなミカンが沢山なっている。



写真8：本部からの4名と一緒に夕食をとった。小泉首相が食事をしたベトナム料理レストラン「ナムフーン」。



写真9：レストラン「ナムフーン」の入り口には、正月のキンカンの木があった。これは、日本の門松に相当し、左にもありツインで飾る。

解を英文にし、明日、ハノイ側に示してお互いの理解を確認し合い、残された課題をさらに話し合うこととして解散した。

#### 4. ハノイ3日目、最終日

7人乗りのタクシーを呼んでもらい、ホテルに帰る。彼らは明日、10時に日本大使館を大貫先生と表敬訪問する予定になっている。ホテルに戻ったら、大貫先生達6人ほどがソファでテーブルを囲んで話し込んでいる。挨拶だけしようとして近づくと、野末先生が「ここに座れ」とソファを指さす。そこで、皆さんの話を聞かせて頂くことにした。本日の話し合いや会場見学で、かなりのことが具体的に詰まってきたのだが、ハノイ側との役割分担などで課題が残されている。助手の3名が熱心に

ノートを見ながら、議論したことなどの整理をしている。だいが話し合いは続き、12時が近づいてきた。杉山君が日本側の理

今日、私は時間をいただいて、宿題を片づけることにした。出発前日の19日(土)に、私の所属するレーザー研の新しい学術分野開拓に関する学術会議の物理研連・小委員会を開催した。昨年末の12月15日に六本木の日本学術会議で開催された物理学研究連絡委員会(物理研連)の全体会議で、新生レーザー研が進めようとしている「高エネルギー密度状態の科学の学術展開構想」について報告し、審議して頂いた。私がセンターの構想委員会委員長でまとめてきたもので、友人でもある北原委員長に構想について何度か相談した。大学独法化後の全国共同利用研のあり方を物理研連で集中審議している時であり、レーザー研の「学術融合型の21世紀型全国共同利用研」という考えに彼は興味を示し、かつ、学術としての新しさや重要さも理解し、共同利用研のあり方の議論の一環で、私たちの構想の報告と議論の機会を作ってくれた。20分、私がパワーポイントで報告し、引き続き、1時間にわたり委員の方々が審議して下さった。結果として、学術としての重要性を大変高く評価して下さり、物理研連として報告書を次回の全体会議(4/27,28)までにまとめることに決まった。そのための関連分野の先生に集まってもらった小委員会である。

19日、外部の先生7人には12時に集まってもらい、昼食の後、レーザー装置を見学して頂き、1時半から5時まで議論して頂いた。全国共同利用での新領域の研究展開を構想しており、学術の内容だけでなく、全国共同利用になるについてのセンター皆の意識改革などについても突っ込んだ貴重な意見を沢山いただいた。土曜日ということで、センターの全教員が出席できたわけではないので、彼らにも早く肉声を伝えたいと、当日のメモから議事録を作り上げるのが今日の仕事だ。

汚い字で綴ったメモを見ながら、当日のその場その場の雰囲気を出しつつ、タイプしていった。タイプしながら各先生の顔が頭に浮かび、発言内容を思い出しながら改めて外部の先生方の発言のありがたさを感じたりした。この作業は11時頃には終わった。その後、この旅行記に取りかかった。途中で12時のチェックアウトの時間が近づいたので、荷物をまとめロビーに降りた。

ホライズンは通常価格、一泊190ドルがシーズンオフということもあり、また、ハノイ校の計らいもあるのでしょうか、一泊なんと55ドル(+10% Tax)。驚きです。9月の阪大フォーラムの際も暑いから当然、シーズンオフでこの程度の料金になるだろうと期待していたが、ミセス・クイ曰く、観光シーズンが始まっているから70ドル+αになるだろうとのこと。しかし、APPCでは10月末のもっと観光に良いシーズンで70ドルにディスカウントしてくれたので、何とかなるだろうと考えている。この日、帰り際に空港で彼女にAPPCの時の旅行代理店から来た料金表の写しを渡した。そして、「10月末で70ドルなんだから、9月末ならもっと安くなるはず。がんばってよ」と伝えた。

荷物を預け、歩いて旧市街に向かうことにした。運動も兼ねてである。当然、帰りはタクシーだから時間の許す範囲で歩こうと考えた。旅行中は食べ過ぎなので昼食は抜く。ホテルから600mほどにある文廟ぶんびょうと呼ばれる孔子廟を見学した。1070年に孔子廟として建設された。1076年には境内にベトナムで最初の大学が出来、その後、700年間、数々の学者や政治指導者を輩出してきたとか。入場無料。入ってすぐに大きな社がある。横には直径2m以上ありそうな和太鼓がある。社の屋根は中国風に先が天に向かってそり上がっている。ガイドブックによれば、15世紀以降300年間に3年に一度行われる科挙(中国を源にする官僚の入学試験。その難しさは数々の挿話を残している)で合格した82名の名前を刻んだ石碑がある。その石碑のある建物は奎文閣けいぶんかくと呼ばれ、昔ここが大学だった。境内が広く分らなかったのも、売店の若い女性に漢字を示し「どこだ?」と聞いたが、漢字が読めないようだ(たぶん、現在、この国では漢字は教えていない)。そこで、「82人が難しい試験に合格し云々」と英語で聞いたら分かったようで教えてくれた。立派な石碑がずらりと並ぶ。全て、石造りの亀の背中に石碑があり、そこには、何年、何月、科挙の試験で一番が誰、2番が誰々(2人)、3番が誰々(10人ほどいる)と

漢字で書いている。孔子廟の中の庭もきれいで、歩いていて気持ちが良い。

そこを出て、さらに歩く。門口が3 mほどの店が沢山並んでいる。道路には車はまばらで、ほとんどがバイクである。信号待ちして、青に変わってバイクが走り出す様は壮観である。ヘルメットはなし。3人乗りもOK。やはり排気ガスで町全体がスモッグで霞んでいるように思われる。多くの人が鼻までかかる大きなマスクをしている。歩いていると、バイクのタクシーがこちらに叫ぶ。「のらんかねー」とでも言って入るんだろう。ジェスチャーで断ると、すぐあきらめるので歩きやすい。

「地球の歩き方」の262頁の地図では大通りのように描いている道を、道の起点に描いている通りの名前で確認しながら歩く。しかし、大通りにしては一方通行で道も狭く、道を間違えたかなと思っていたら、横に国立図書館があった。確かにこの道だと、反対側の歩道を歩いていくと、大きなガラス張りのヘアーサロンがあった。中で3人ほどの女性が「おいでおいで」をしている。通り過ぎた後で、「そうだ、来る前に髪を切る暇が無く、今回帰ったら、日曜から北京に行く前に散髪しなければいけない。試しだ、散髪するか」と考え直し、その店に戻る。虎刈りにされても困るので、ヘアスタイルの見本はないか、と聞くが通じない。すると、横にいたスーツ姿の男性が「英語が分かりますか」と聞くので、通訳をして頂いた。「料金は」と聞くと、壁を指さす。そこには英語で「3 Dollars: Hair cut, Shampoo, Razor, Dry」。その下には「2 Dollars: Hair cut」とある。英語で書いていることから、この近辺は大使館など多いので外国人の客が多いのだと、まずは安心する。次に、髪型の見本の写真がないか聞いたが無いという。そこで、彼に、後と横の生え際は短くし、上の方まで刈り上げないように言ってもらう。ついでに、時間はどれほど掛かるか聞いたら、20分だという。たぶん私が急いでいて時間を聞いたのだと店の人は判断し20分と言ったと思ったので、彼に「俺の時間は十分ある。ゆっくり丁寧にやってくれ」と伝えてもらい、商談成立。



写真10：ハノイで散髪をした。カットとシャンプー、カミソリで3ドルだった。理髪師の彼女、腕は確か。日本に来ると良い稼ぎになるのに。

レトロ映画に出てきそうな椅子に座り、干し立てのコットンのカバーを首で締めてもらい、どうするのかと様子をうかがう。まずは、隙バサミで刈る。良く切れるハサミのいい音がする。次の刈り上げは昔懐かしい手動バリカンだ。でも痛くない。とても上手だ。そして、ハサミで仕上げる。ハサミが芸術品のような手製のハサミ。良く切れる。シャンプーをそこでして、頭をマッサージしてくれ、流すために場所を移動。仰向けになり、お湯で洗ってくれる。眠くなるほど気持ちが良い。もとの椅子に帰り、生え際のカミソリはシャボンも付けずにする。カミソリの切れがとても良く、気持ちが良いほど痛くない。そして、ドライヤーをし、リキッドを着けて整髪する。最後にハサミをもう一度入れて終わり。約30分。すっきりしました。3ドルとはありがたい。

レトロ映画に出てきそうな椅子に座り、干し立てのコットンのカバーを首で締めてもらい、どうするのかと様子をうかがう。まずは、隙バサミで刈る。良く切れるハサミのいい音がする。次の刈り上げは昔懐かしい手動バリカンだ。でも痛くない。とても上手だ。そして、ハサミで仕上げる。ハサミが芸術品のような手製のハサミ。良く切れる。シャンプーをそこでして、頭をマッサージしてくれ、流すために場所を移動。仰向けになり、お湯で洗ってくれる。眠くなるほど気持ちが良い。もとの椅子に帰り、生え際のカミソリはシャボンも付けずにする。カミソリの切れがとても良く、気持ちが良いほど痛くない。そして、ドライヤーをし、リキッドを着けて整髪する。最後にハサミをもう一度入れて終わり。約30分。すっきりしました。3ドルとはありがたい。

軽くなった頭で、昨夜の教会の所まで来る。そして、湖のたもとにでる。亀の塔の昼間の風景を写真に納め、その横のデパートで買い物をする。まず、革の上着の店に行く。品物を確かめる。何個か見ていると、革のプレザーが価格100ドル程度。正札を見ていたら、別に日本語で書いた正札もあった。何と、¥78,000と書いているではないか。日本向けに出す予定のものをこちらでも販売しているのかな、などと思う。品物は確かであることは触たり、着たりすると分かる。とても軽い上等な革製品だ。プレザー

は持っているのでジャンパーを買うことにした。XL ならぬ XXXXL サイズがちょうど合うのでこれを買った。店員が「10% discount」というので、ありがたくちょうだいすることにした。83ドル。来週の北京に着て行けそうだ。

4階は生鮮食品を除く食料品のスーパーになっていた。ここで、おみやげのチョコやお茶などをたんまりと買う。次に、悪のりして前からほしかった大きな書類入れのカバンを買うことにした。革製で、少し大きい、値段を聞くと28ドルだという。捨てるのもいいか、と買うことにした。買う時は思いっきりが大切。「迷ったら買う」、これが私の長年の海外での買い物の経験から得た鉄則である。買わずに帰国して後悔した苦い経験が何度となくあるからだ。このカバンに持っている荷物を放り込み、近くのDVD店に行く。落ち着いてみると昨日見過ごした良い映画がだいたいある。結局、「ゴッドファーザー」の5巻セットと7本のDVDを買った。



写真11：街を歩いていると、露天の雑誌を売っている店に出くわす。そこには、日本のアニメがたくさん並んでいる。ローマ字ベースの国語だから、左開きにするため、マンガは左右反転して印刷されている。「日本人は左利きが多い」とこの国の子供達は思っているだろう。これは、米国や欧州でも同じだ(ただ、ドイツで「コナン」を買ったら、右開きで、最後の所に「日本のマンガの読み方について」の解説があり、「さすが、ドイツ」と感心したものだ)。今回は、我が家愛読の「コナン」(7,500ドン)と「金田一君の事件簿」(5,000ドン)を子供に見せるために買った。

で、大貫先生と了解したとのこと。ヒューさんはこの国では特別な人で、元科学技術大臣、前ベトナム物理学学会会長、現アジア太平洋物理学学会連合(AAPPS)理事。また、彼は旧ソ連のレーニン賞を受賞しており、この国ではノーベル賞学者に匹敵する。彼の影響力は大きく、彼が加わることで会議自身がやりやすくなる。また、政府からの財政的支援なども受けやすくなる。彼とは昨年の5月、AAPPSの第12回理事会で韓国の慶州で会ったのが初めて。その際、APPCの運営議長でもあった彼の影響力を色々な人から聞いて知った。今回の阪大フォーラムも1月の台湾・高雄での第14回理事会で私がAAPPSの後援を取り付けたこともあり、ベトナムからの理事であるヒューさんが支援するのは当然で、また、彼に協力してもらうことが大切と考えていた。

ポスターの件についてもハノイ側からの正式の見解を大貫先生に伝えたことを教えて頂き、「今のポスターを持って、政府の上層部に支援のお願いなど、とうてい行けたものではない」との困惑の理由も色々聞かせて頂いた。欧州でもそうだが、アジアも長い歴史があり、歴史は戦争の歴史でもある。歴史を背

ここでタクシーを拾いホテルに帰った。まだ、集合時間の4時半には1時間あるが良だろう。ホテルに着き、大貫先生と話す。本日の話し合いで、昨夜議論した問題点がかなり解消し、ハノイ側と了解事項の確認をすることが出来た。今回の目的である協議事項については両者前向きにじっくり話し合い、有益な時間を共有することが出来た、目的は果たせたと先生は上機嫌であった。また、直接関係者がface to faceで会談したことで人間的なつながりも広い範囲で出来たことは第2の目的も果たすことが出来た、と。人間同志の繋がりがいかに大切かはアジア太平洋物理学学会連合(AAPPS)で毎回感じることだ。

お別れに来ていたベトナム側議長のルオンさんと話す。私が以前からお願いしていた、グエン・ナム・ヒューさんを招待し、バンケットの締めで喋って頂くこと

負いながら、我々は未来を築いていこうとしているのであり、この様な国際協力で重要なことは「相手の国の人間になったつもりで、日本側の提案を考えること」である。これについてはAAPPSの本部に関連して、中国物理学会会長のヤン教授と昨年8月会談した際、イヤというほど思い知らされた。島国の日本人が思うほど、歴史はロマンチックではなく、殺戮の歴史であることを大陸の人間は先祖から教え込まれている。ルオンさんには「Web-siteの公開までに若者を引きつけるような未来志向のポスターを作りますよ」と返事する。

バンは2台で、本部の人も含め19名の日本からの調査団を乗せて空港に向かった。ハノイの北西にあるノイバイ国際空港まで40分程度。途中、高速道路を通る。バイクが沢山走っているので進行方向を見ていると心臓に悪い。高速道路ではバイクもヘルメットが義務づけられているようだが、それでも2人乗りも多く、狭い高速道路をヒュイヒュイとすり抜けていく。APPCの際も、今回来る時も、暗かったので風景を見ることがなかった。今日はよく見える。郊外に出ると日本と同じ水田が広がっている。3期作(年に3度、同じ稲を実らせる)も出来るようで、ちょうど田植えのシーズンであった。日本で昔懐かしい田植えの風景が広がる。そして、水は2人でヒモの真ん中に付けたバケツでくみ上げている。モノクロ映画の世界のようだ。所々、建設中のモダンな住宅地も見かける。また、道路横の大きな看板は日本や韓国はじめ世界中のメーカーの広告塔であふれている。

今日は2時間かけてホーチミン市に国内線で戻り、ホーチミン空港 23:30 発のベトナム空港で関空に向かう。19:00 発の飛行機を待つ間、待合いにある土産物屋で蓮の実のお菓子など色々買った。これで、ドンは全て無くなった。ホーチミン空港では係員が大阪行きの客だけ案内してくれる。国際空港の入り口まで案内してくれた。ここで、出国のための空港利用料12ドルを払い、待合いにて11:30からの5時間の関空までのフライトを待つ。定刻に飛行機は出発し、5時間の中途半端な時間での帰途であった。朝の6:30に関空に着いた。これで短い視察旅行は終わった。

昨年10月にハノイに来た時は、APPCの午前中が全体講演で最新の物理を網羅できることから、買い物にも出ずほとんど聞いていた。午後のパラレルは関係あるところだけ聞いて、あとはホテルで昼寝をしていた。かなり疲れていたのかよく寝たことを覚えている。目の下にある開閉屋根の大きなプールを眺めながらも泳ぐ気にもならないほど疲れていた(今回と別のホテル)。しかし、今回は自分の足で街を歩くことが出来た。歩いてみるとなかなか趣のある良い街であることがわかった。9月にまた来るのが楽しみになった。松田先生とも常深さんとも、また、ハノイで一緒するのを楽しみにしている。

今回は、理学研究科の数学、物理、宇宙地球科学専攻から13名の教員(教授9, 助教授1, 助手3)と秘書の由良さん、本部から4名の事務官、私を含め19名の団体だった。理学研究科の先生方ともだいぶ親しくなり、レーザー研が進めようとしている学術融合型の研究を助けていただけそうで喜んでいいる。総務責任者(Secretary General)にご指名下さった21世紀COEの代表、大貫先生に感謝しつつ、筆をおきたい。